



[令和 3 年 11 月 10 日 定例会発表要旨]

円空ゆかりの山岳霊場で“コロナ退散”祈願

手稲郷土史研究会 会員 三 國 勲

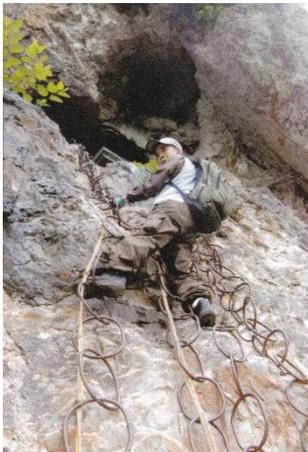
◆ 道内最古の山岳霊場を参詣

昨年 6 月、道南の桧山管内 せたな町大成区（旧 大成町）の太田山（485m）に祀られた『太田神社』へ詣で、“コロナ退散”を祈願してきた。

『太田神社』は、今からおよそ 580 年前、室町時代中期の創建とされ、松前藩の始祖・武田信廣が享徳 3（1455）年、太田に上陸した際に「太田権現」と名付けたと伝わる。断崖にそびえる太田山は“道南五大霊場”の一つで、その 8 合目の洞窟に『太田神社』の本殿がある。北海道最古というこの山岳霊場は、“航海の守り神”“霊神の加護”として古くから信仰を集めてきた。

現地を訪れたとき、私は 79 歳 6 ヶ月だった。参詣なのか 登山なのか分からない本殿までの苦難の（？）道中を紹介したい。

まず、参道の階段を見上げて、驚いた。おそろしく長く、勾配がきつい。奥の方は木立が茂って陽も差さず、薄暗くて不気味に感じた。平均斜度 45 度という階段には、上から太いロープが 2 本ぶら下がっている。意を決して 登り始めたが、目の前に高い壁が立ちはだかっているようだった。ロープは足に絡んでかえって危険に思われたので使用せず、自力でなんとか約 140 段を登り切った。



本殿は絶壁の上にある



洞窟の本殿にたどりついた

ところが、それに続く山道も石ころだらけで険しく、おまけに雨で土砂が流れたのか、大木の根が足もとを邪魔する。ロープが張られているので迷うことはないが、参道といっても、まるでけもの道のような幅しがなく、大きな石にもはばまれて、つまずいて転んだり、這いつくばったりしながらも、いよいよ本殿の鳥居を見上げるところまで来た。

しかし、本当の修験の道はこれからだった。深い谷底が見える橋を渡らなければならないのだ。勇気をふるって渡り終えると、ほぼ垂直の絶壁に鉄の鎖が下がっていた。洞窟の本殿は、その真上にある。恐ろしさは感じたが、登らないことには本殿にはたどりつけない。鎖だけを頼りに手足に力を込めながら約 7m の壁をよじ登り、やっと到着した。ふもとの鳥居からは 一時間以上かかった。

4 畳ほどの広さの洞窟の中で、一息。本殿からは、真っ青な日本海と奥尻島が望め、あまりの絶景に 道中の苦労もいっぺんに吹っ飛んだ。ここまで無事にたどりつけたことのお礼を述べ、持参した御神酒や菓子、大枚（？）を捧げて、新型コロナウイルス感染症の終息と自身の健康、そして手稲郷土史研究会の発展をしっかりと願った。

登山では 下りの方が危ないという。一步一步気を引き締めて、ゆっくり足を運ぶ。ひざはガクガク、何度か転びもしたが、ケガなく出発地点まで戻ったときは、我ながら感心した。





せたな町大成図書館（旧 大成町立図書館）が所蔵する江戸時代に描かれた絵図には「太田山権現」と記されている

◆「太田神社」の由来と現状

明治5（1872）年、“廃仏毀釈”によって、それまで「太田権現」と呼ばれていたこの山は『太田神社』と改称され、「猿田彦大神」を祀るようになった。江戸時代には、山僧 宗俊（定山和尚？）が別当として居住していたこともあるらしい。円空や木喰などの修行僧も訪れて多くの仏像を彫ったが、大正11（1922）年に本殿が焼失し、灰燼に帰してしまった。のちに円空ゆかりの地である岐阜県丹生川村（現在の岐阜県高山市丹生川町）の円空彫りの継承集団「円刀会」が旧大成町産出の杉材を使って仏像を復元し、日本海沿いの保管施設に3体展示されている。

例大祭は毎年、6月27・28日に山麓の拝殿周辺で営まれ、二日目には白装束の地元の若者が本殿をめざす“御山掛け”が行われている。「江差の笹山稲荷神社」、「奥尻の賽の河原」、「熊石の門昌庵」、「恵山の賽の河原」とともに“道南五大霊場”の一つとされる。

近年、せたな観光協会が、本殿参詣と日本海に沈む夕日鑑賞をセットにしたツアーを実施。本殿にたどりつくまでの道のりの険しさが“日本一危険な神社”などとメディアに取り上げられ、全国から訪れる人が増えてきているのだという。しかし、安全が保障されているわけではない。私が参詣したときも、吊り橋や鉄鎖などは劣化が進み グラグラしていた。これら参道の整備は すべて神社の氏子が支えているが、高齢で人数も少なく、資金も足りないと聞いた。

せたな町では観光ポスターやパンフレットなどで『太田神社』の紹介はしても、政教分離の立場から、神社の施設である参道の整備には関与できないらしい。せたな観光協会は、現地にはヒグマ・マムシ・スズメバチが生息すること、落石や転落の危険があること、ロープ・橋・鎖が劣化していることを伝え、自己責任で行動するよう呼びかけている。さらに、参拝には日本山岳ガイド協会の有資格者などと同行することや 登山用の装備で臨むことも薦めている。昨年、私はガイド無しで本殿を参詣したが、コロナ騒ぎが落ち着き、体力が許すなら、ぜひ再び訪れてみたいと思っている。

ぶれいくたいむ

野外彫刻のたのしみ



本田明二「鹿を抱く少年」
（富丘小学校 前庭）

札幌にゆかりのある彫刻家の作品が、手稲のまちに点在しています。たとえば、本郷新『太陽の母子像』（手稲コミュニティセンター）、本田明二『鹿を抱く少年』（富丘小学校）、國松明日香『雪だるまをつくる人』（JR 手稲駅）、渡辺信『颯』（ぶろむな一ど・ていね）、小野寺紀子『未来と語る子』（稲積小学校）、永野光一『大地から』（新発寒小学校）、高津和夫『和』（新陵小学校）、ピエール・セカリー『幻想の鳥』（前田森林公園）…etc.

のんびり散策しながら、アート鑑賞はいかがですか。いつもの景色もきっと新鮮に映るはず。素敵な野外彫刻で、寒さ厳しい季節を どうぞ心豊かに…。

※学校などの敷地内で作品を鑑賞する際は、くれぐれもご配慮をお願いします。 [J]

「札幌市手稲区」は、平成元（1989）年、西区との分区によって生まれた行政区画です。かつては、手稲山の尾根より東、現在の「琴似発寒川」を南東端に、「星置川」「清川」を北西端に、「新川」の一部および「旧中の川」を北東端とする広い範囲が、ひとつの自治体としての「手稲」でした。

▶ 幕末から明治初頭にみる和人の入地

安政4（1857）年、箱館奉行所から“蝦夷地の跋渉”を任じられた山岡精次郎が属吏を率いて「サッポロ」周辺を調査し、農夫を募って「ホシオキ」「ハッサム」の開墾に従事させたという記録が残ります。同年にはやはり「ホシオキ」に中嶋彦左衛門、中川金之助の名前が見られ、これらが和人の入地としては最も古いものといわれています。また、探険家松浦武四郎も「ハツシャフ（ハッサム）」など“イシカリ十三場所”（アイヌと和人の交易地）の周辺事情について箱館奉行所へ報告していることから、当時は“アイヌコタン”も複数存在していました。

その後、明治のはじめにかけて、和人の移住が相次ぎます。とくに開拓使判官島義勇の従者として来道し「ベッカウス」※現在の西区西野・西町・宮の沢付近へ入植した福玉仙吉は、札幌神社※のちの北海道神宮にエゾヤマザクラ150余本を献納したことで知られ、これが“桜の名所”の端緒となりました。

明治4（1871）年には、開拓使が「サンタロペツ」※現在の富丘・手稲本町付近へ通行屋を設けています。

なお、現在の「発寒古川」や「三樽別川」の周辺からは縄文時代の遺物が多数出土しており、人びとの生活の歴史は古代にまで遡ることも明らかにされました。

▶ 士族の集団移住により「手稲村」が誕生

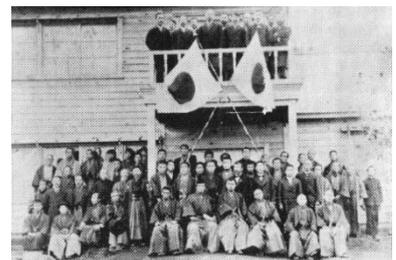
明治5（1872）年1～3月、旧仙台藩白石城の片倉小十郎の家臣団47戸が、開拓使貴属として「ベッカウス」へ入植。「発寒村」に属していたこの地を割いて「手稲村」とします。地名はアイヌ語の「テイネ・イ」に由来し、以後、同年が“手稲のはじまり”とされるようになりました。

開拓使の記録によると、明治6（1873）年から「旅人宿、飲食店、馬夫、樵夫、炭焼等ヲ業ト為ス者」が増えてきたとあります。いずれも官募移民を伴わないもので、当時の札幌周辺では珍しく自然発生的に集落が形成されていったと思われます。そこで、旧片倉家臣団の入植地方面を「上手稲村」、サンタロペツ方面は「下手稲村」として分割することになりました（同6年10月頃か?）。下手稲村からは明治15（1882）年12月に「山口村」の新設が告示されています。山口村は同14（1881）年、山口県から宮崎源治右衛門を総代とする人びとが入植したことに始まりますが、周辺にはすでに50戸あまりの移住者があったといえます。

明治21（1888）年8月、“三力村戸長役場”が下手稲村に置かれ、同35（1902）年4月には上手稲村・下手稲村・山口村が三つの大字に編成されて、二級町村制の施行による「札幌郡手稲村」が成立しました。村会議員選挙も同年に実施されています。

▶ 手稲村の発展

軽川※現在の手稲本町・前田を中心とする下手稲村は、明治14（1881）年に「官営幌内鉄道」の簡易停車場が設けられ、同21（1888）年には花畔村への新道（石狩街道）も開通して、物資の集散地としての機能が高まっています。明治中期以降は、「前田農場」、「北海道造林合資会社」、「日本石油北海道製油所」などが次々と創設され、また巡査駐在所や郵便局の設置など、市街地の形成が急速に進みました。三樽別※現在の富丘では温泉旅館「光風館」が開業し、札幌周辺から観光客が訪れる名所となりました。



明治43年撮影 手稲村役場新築落成記念
〈手稲町「手稲町誌」より〉



明治30年代撮影 北海道造林軽川苗圃
〈北海道大学附属図書館所蔵〉



明治44年撮影 前田農場軽川本場放牧場
(北海道大学附属図書館所蔵)

上手稲村では 明治 18 (1885) 年頃より、広島県や福井県出身の入植者が増えていきました。用水路の完成によって造田がさかんになり、やがて“西野米”が特産品となっていきます。旧家臣団の移住地周辺もリンゴやナシの果樹栽培で知られるようになります。開墾当初は“蝗害”などに悩まされていた山口村も、^{こうがい} 土壤改良を試みながら 純農村として伸びていきました。

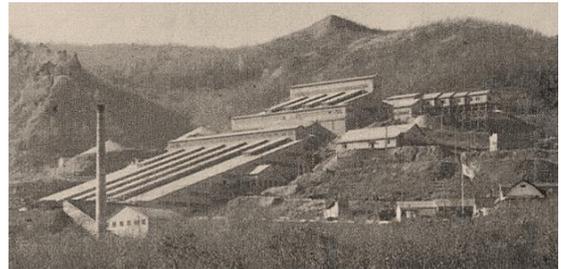
また、明治5 (1872) 年に旧家臣団が設置した「時習館」(手稲東小学校の前身) は手稲における学校教育のさきがけとなり、その後、同 17 (1884) 年には下手稲小学校 (のちの手稲中央小学校)、同 25 (1892) 年には山口小学校 (のちの手稲北小学校) が開校しました。

明治 35 (1902) 年の 二級町村制の施行を経て大正期に入り、手稲村は急激な発展を見せるようになります。従来の農業が順調に推移する一方で 畜産業が大きく伸び、鉱工業も勃興し始めました。

明治 42 (1909) 年の村の総生産額をみると、139,800 余円のうち、林産が 20,900 余円、畜産が 12,000 余円、残りが水稻・大小豆・麦類ほかの農産額となり、農業が主力であったことがうかがえます。ところが、大正 9 (1920) 年の総生産額をみると、農産 553,986 円、鉱産 301,069 円、畜産 134,308 円、工産 45,082 円、林産 10,387 円、合計 1,044,832 円となっていて、鉱産および畜産の占める割合が著しく高くなっていることがわかります。鉱産増加の要因は 明治 45 (1912) 年から操業した「日本石油北海道製油所」によるもので、畜産では、同 39 (1906) 年に茨戸から本場が移された「前田農場」と 大正 7 (1918) 年開設の「極東煉乳会社軽川農場」の功績が大きいものと思われる。

大正 11 (1922) 年、「^{がるいしきどう} 軽石軌道株式会社」が馬車鉄道の営業を開始。昭和 3 (1928) 年には「北海道造林合資会社」が苗圃を宅地造成し、分譲を始めます。昭和 10 (1935) 年以降は、三菱鉱業株式会社が経営を引き継いだ「手稲鉱山」の発展が 村勢伸展の原動力となり、昭和 16 (1941) 年の人口は 大正末期の 7 倍、13,000 人を数えるまでになりました。

[編責: 広報部]



昭和 15 年頃撮影 手稲鉱山選鉱場
(手稲郷土史研究会所蔵)

* 令和 4 (2022) 年は、士族の集団移住によって「手稲村」が誕生してから 150 年という記念の年に当たります。その歩みを小紙今号と次号でおさらいします。手稲区役所 1 階の「手稲歴史資料展示コーナー」のパネルも併せてご覧ください。

* 参考文献: 「手稲村史原稿」(仙堂控え)、手稲町『手稲町誌』、札幌市『手稲町誌』、同『新札幌市史』、札幌市教育委員会『さっぽろ文庫 1~札幌地名考』、同『さっぽろ文庫 50~開拓使時代』、同『新札幌市史機関誌 札幌の歴史』、札幌市手稲区『手稲でみつけた手稲のはなし』、手稲郷土史研究会『史料に見る手稲今昔~手稲歴史年表』、ほか。



★「手稲歴史資料展示コーナー」の展示替え 手稲区役所 1 階の情報提供室には、気軽にふるさとの歴史に触れてもらおうと「手稲歴史資料展示コーナー」が設けられています。手稲郷土史研究会も区と協働で その運営の一端を担っており、12 月中旬からは『士族移住から 150 年—駆け足でたどる「手稲」の歴史』をテーマとしたパネルを展示する予定です。各地域の「歴史秘話」も順次紹介していきます (初回は 富丘・西宮の沢編)。ぜひ足をお運びください。

次回定例会 ⇒ 発表内容「ウシのはなし」石原重隆 (手稲郷土史研究会 会員) / 令和 4 年 1 月 12 日 (水) 13:30~ / 手稲区民センター 3 階 視聴覚室 / マスク着用・手指消毒のこと。当研究会の会員でない方の聴講は申し込みが必要です。

手稲郷土史研究会 会報「郷土史といぬ」第 164 号 令和 3 年 12 月 8 日発行 発行責任者: 永井道允 (手稲郷土史研究会 会長) 編集: 菅原純子・佐々木光男
* 〒060-0808 札幌市北区北 8 条西 3 丁目 札幌エルプラザ 2 階 札幌市市民活動サポートセンター レターケース No. 277 手稲郷土史研究会
* メールアドレス kyoudoshi_teine2005@yahoo.co.jp * TEL 090-3381-4994 (担当: 林)